www.wako.ac.jp/gender/

vol. 20
2012年10月発行

GF ジェンダーフォーラム通信
GENDER FORUM PRESS
女とは? 男とは? 考えるマガジン

和光大学　ジェンダーフォーラム　〒195—8585　東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044—989—7777　内線4112

GF WORKSHOP

「ピナツボ復興むさしのネット（ピナット）」のワークショップを開催しました。

『戦争と女性を考える』

14歳のときに日本軍の「慰安婦」にさせられたフィリピン女性の体験と「その後」の人生

7月4日（水）に、ジェンダーフォーラムと共通教養科目「東南アジアのことばと文化」が「戦争と女性を考えるワークショップ」を共催しました。

講師は「ピナツボ復興むさしのネット」の山田久仁子さん。山田さんは「慰安婦」問題を身近に引き寄せて考える参加型ワークショップを高校や大学、市民団体などで実施してきました。

「ロラネット」（フィリピン元「慰安婦」支援ネット・三多摩）によって考案されたこのワークショップは、レメディアス・フェリアスさんという女性の体験を中心に展開していきます。レメディアスさんは、第二次世界大戦の激戦地、フィリピンのレイテ島に1928年に生まれ、14歳のときに日本軍の「慰安婦」にさせられました。

後年、彼女が当時の体験を描いた絵本『もうひとつのレイテ戦』（1999年、竹見智恵子監修）のスケッチとストーリーが教材キットとして使われます。「いまの話を聞いて、どんな気持ち？」　レメディアスさんの「慰安婦」体験を読み上げた山田さんが問いかけ、参加者は「いまの気持ち」をワークシートの選択肢から選びます。

レメディアスさんの「その後」の人生も紹介されました。15歳でアメリカ軍に救助され家族との再会を果たしたこと。20歳で最初の結婚し、離婚や死別の苦労を乗り越えて4人の男の子を育て上げたこと。65歳で「慰安婦」であったことを名乗り出て、日本に正式な謝罪を求める活動に参加したこと。2001年、73歳のとき山田さんたちの招きで来日したこと。

来日したときの様子は映像に記録されています。そのなかでレメディアスさんは、家族から、顔を出して活動を始めたことを責められたと告白しています。再々婚した夫からは「別れよう」と言われ、息子たちからは「恥ずかしくて外に出られない」と言われたそうです。家族に沈黙させられ、トラウマから回復する機会も与えられずに生きていた元「慰安婦」もいるなか、レメディアスさんはNGOのサポートを受けて、活動に向かっていきます。そして「二度と戦争を起こさないように一緒に行動しましょう」と静かに訴えるのです。

ワークショップの圧巻は、このレメディアスさんからの映像メッセージを聞いた後に書き留めた「気持ち」と、「14歳の慰安婦体験」を知った直後に書き留めた「気持ち」の変化を、参加者が共有することでした。「慰安婦体験」については「悲しみ」「怒り」「恐怖」「混乱」「無力感」などの言葉が並びました。しかし、後のレメディア

参加した学生の発言を上手に引き出すピナツボの山田久仁子さん
・2012年7月4日・J-103教室

スさんの活動に触れて「尊敬」「勇気」「使命感」といった感情がわき上がってきた、と参加者たちは報告しました。また、「もっといろいろ知らないといけないと思った」という意味で「興味」という言葉を挙げた参加者もいれば、「忘れない責任がある」という意味で「責任」を挙げた人もいました。来日するときのレメディアスさんの気持ちを想像して「不安」、「政府に認められる前に亡くなってしまった方々」を想って「悲しみ」など、皆が真剣に感想を語ってくれました。

元「慰安婦」の無力なイメージの変更をせまり、短時間でもこの問題に真摯にかかわれる仕掛けが組み込まれた素材やワークショップでした。何より講師の山田さんのファシリテートが「性」や「暴力」、「戦争責任」といった重い話題について安心して話せる雰囲気を作ってくれました。どうもありがとうございました。

（**杉浦郁子**・ 現代人間学部現代社会学科 ）

60名ほどの参加がありました・2012年7月4日・J-103教室

COMMENT FROM STUDENTS

「戦争と女性を考えるワークショップ」に参加して

◉総合文化学科6年生・男

レメディアスさんは[日本を訪ねた際]、『今、日本のみなさんが悪いわけではない。たた、フィリピンで［従軍慰安婦］があったという事実を知っておいてほしい』と言いました。旧日本軍の子孫である私たち日本人が、レメディアスさんや多くのフィリピン人の犠牲者のために何かの力になりたいのです。私たちは戦時中、フィリピンで起こったことを一生忘れてはいけない。後世に語り継いでいく義務が私たちにあると思います。

◉現代社会学科4年・女

なぜ日本政府は慰安婦だった方々の声に耳を傾け、お詫びをしないのか。その程度の行動だけで、どれだけ多くのフィリピン人の心が穏やかになり、どれだけ多くの犠牲者の人生が変わるのかと思うと、日本国の責任としてせめて謝罪をしてほしい。

◉現代社会学科3年・男

従軍慰安婦問題を掘り下げて考えると、『それは自虐史観だ』という声が聞こえてくる。その言葉を聞くたびに、何事も反省なくして成長などはありえないという思いにいたる。確かに自国が犯した過ちをふりかえるのは、つらいものだが、二度とそのようなことを繰り返さないためにも、私たち若い世代こそ、その事実をうけとめ、みなで考えていかなければならない。

◉芸術学科5年・女

レメディアスさんが被害を受けた日本に笑顔で来てくれたことと、戦場で死んでいった日本兵もかわいそうだったという言葉が印象に残りました。

GF LECTURE

なぜ片付けられないのか?—その現実と暮らしのヒント

片付けられない人を「怠け者」扱いしないで、きちんと理解してあげることが大切！

2012年7月5日に「お片付け講座」が開催されました。講師としてお招きした本田美貴さんは、発達障害の知識などに基づきながら、片付けられない女性を対象に、部屋の片付けや暮らし方のサポートをしておられる方です。日本全国から依頼を受け、これまでに片付けた部屋はすでに500件以上とのこと。依頼者の年齢は、20代から70代まで幅広く、アメリカに暮らす日本人女性からの依頼で、ニューヨークまで出張片付けに行かれたこともあるそうです。

講演の最初に本田さんが指摘されたのは、いわゆる「ゴミ屋敷」は意外と私たちの身近な存在だということです。家や部屋の中にモノやゴミが入りきらず人々の目に触れることになった場合にだけ騒がれてテレビ等で報道されることはありますが、室内に収まって可視化されていないものは、私たちが想像しているよりもずっとたくさんあるというのです。偏った報道によって私たちは、片付けられない人はごくごく一部の「変な人」だという先入観を持ちがちですが、彼らは特別な存在ではなく、私たちの周りにいる普通に日常生活をおくっている人たちなのです。忙しくて片付ける暇がないという話はよく聞きますが、忙しくても片付けられる人はたくさんいるわけですから、「片付けら

れない」というのは、色々な生活習慣のなかで片付けることの優先順位が低いことを意味します。問題は、なぜ片付けの優先順位が低いかです。その理由は人によって様々です。もともと育った家庭で、親や家族が何らかの理由で片付けができないために、自分も片付けることを教わってこなかったようなケースもありますし、潔癖すぎる性格が仇となる場合や、ペットの死や彼氏との別れが心の傷となって、突然片付けができなくなることもあるそうです。単に片付け方を知らないという場合には、本田さんが一から片付け方を教えるところから始めますが、本人の性格や心の傷が原因の場合には、よく話を聞いて本人が自分と向き合うところから始めさせます。ただ、発達障害等の精神障害が原因となる場合には、医師の診断自体難しく、薬の処方などによっても改善しないことが多いので、日常生活の工夫によって対応するしかないとのことです。

このように、片付けられない理由は一様ではないので、その対処方法も様々ですが、片付けたいのに片付けられない人々をいちばん苦しませているのは、片付けられないこと以上に、周りの人間の無理解なのだそうです。特に、女性が片付けられない場合の世間の風当たりは強く、他人に相談すらできず悩んでいる女性は多いとのこと。発達障害、アスペルガーといった精神障害については近年知られるようになってきましたが、そうした精神障害と「片付けられない」ことが密接に関係していることはあまり知られていません。片付けたいという意思はあるのに片付けられない人を「怠け者」扱いせず、その存在をきちんと理解してあげることが大切なのだと本田さんは強調されていました。

講演の中では、誰でもできる片付けの工夫なども交えながら、今までに片付けた家のビフォー・アフターをスライド映像とともに紹介してくださいました。本田さんのブログ「整理収納サポート隊　by　マンマミーヤ」（http://blogs.yahoo.co.jp/mikip0620）でもその活動が写真とともに詳しく紹介されていますので、興味のある方はぜひご覧ください。（**徳永貴志**・経済経営学部経済学科）

COMMENT FROM STUDENTS

「お片付け講座」を聞いて

◉《片付けが出来ない人＝めんどくさがり＝だらしない＝悪》ということではなく、できないことはできないのだから、出来る範囲で片づけられるように工夫していくことが大切なんだと思った。

◉日本には「もったいない」という文化があり、アメリカのように何でも収納できてしまう広い部屋に暮らすと、モノを捨てられなくなってしまう日本人がいるのは面白い。

◉女性は片付けができるというイメージがあるため、できない女性は文句を言われるが、男性の場合は仕様がないと諦めてもらえる。こんな見方は間違っていると思う。

◉発達障害のことをNHKでもやっていた。自分にぴったり当てはまるものが多かったのでギクッって感じ。私も発達障害なのだろうか。

◉全く理解できない内容でした。最近は何でも病名になるけど、本当に病気なのか疑問に思う。こんなのが病気なら、なんでも病気になってしまうのではないか。

◉講演を聞いて考えが変わった。片付けられない人々の中に発達障害の人がいると知って驚いた。片付けられない人たちにはそれぞれ理由があるんだなぁ。

◉驚くようなことばかりだった。一番印象に残ったのが、どこにでもこんな人がいるということだ。快く手伝えたらいいなと思う。

「〈ゴミ屋敷〉は意外と私たちの身近な存在」と語るお片づけアドバイザーの本田美貴さん・2012年7月5日・J-102教室

ジェンダーフォーラムと共通教養科目「火の人間史」の共催で

サバイバル料理に挑戦！　和光流クッキング

今年のGFクッキングは、可能なかぎり文明の利器を使わないで、おいしい料理を楽しみました。

6月14日（木）に、ジェンダーフォーラムと共通教養科目「火の人間史」が「和光流サバイバル・クッキング講座」を共催しました。

講師は「火の人間史」を担当されている関根秀樹先生。和光大学「名物」のこの人気授業では「人間の生活技術として、また環境保全技術としても必要不可欠な焚き火や焚き火料理の実験・実習」（シラバスより）が行われています。今回の和光流クッキングは、ジェンダー・フォーラムがその実習をサポートするかたちで実現しました。

関根先生に様々なサバイバルの「わざ」を教わりながら、できるだけ文明の利器を使わず、皆で美味しい料理を作って楽しむという企画、題して「サバイバル・クッキング講座」の報告です。

「サバイバル」は男性の領分、「クッキング」は女性の領分と考えられがちですが、どちらも性別を問わず身につけたい生活のための技術です。クッキングは、疲労を軽減したり、けがや病気を予防したりする知識を含み、日常生活の基盤となる体力を培いますし、サバイバルに関する知識は、暑さ寒さや空腹、諸々のストレスに対応する力につながります。どちらも現代日本を生きる私たちにとって重要な知識でしょう。

とはいえ、実習ではこのようなうんちくを離れて、皆でにぎやかに料理を作りました。メニューは、チャーカレー、青竹焼きバウムクーヘン、炭火焙煎コーヒーです。その様子を写真でお楽しみください。

参加した女性の一人が「すごく達成感を感じています。これまではこういう行事に最後まで参加して、後始末までするということがなかったので大変勉強になりました」と話してくれたのが印象的でした。

（**杉浦郁子**・現代人間学部現代社会学科）

青竹で器を作ります。

まずは火おこしと焚き火から。

青竹製の見事なスプーンができあがり。

お箸の頭に和光ネコがチカッと！

キャンパスの一角に
火を使える場所があります。

青竹（手前）で玄米を炊いています。

バウムクーヘンは青竹でこんなふうに焼きました。

残り火で大好物の焼き芋を。

大鍋でカレーを作ります。

青竹で即興の演奏を！

カレーにありつけたのは日が暮れた後でした。

チャーカレーの作り方

炒飯の〈チャー〉を冠した、短時間で一人分でも作れるおいしいカレー。“弱火でジックリ・コトコト煮込まない”のがミソです。

❶ひき肉、たまねぎ、じゃがいも、缶トマト、その他お好みで野菜を加えて炒めます。残り野菜でもOK。

❷お湯でルーまたはスパイス（例えばターメリック・クミン・コリアンダーなど）を溶かし、炒めた具材と合わせます。

❸切干大根を水で戻し、福神漬けの代わりに添えて完成。いただきま～す！

〈坂本文庫〉に追加寄贈します。

坂本喜久子

5年前の寄贈の時に手元に留めおきましたものと、その後付け加えてきましたものから選んで、62冊を〈坂本文庫〉に追加させていただきます。

リストの最初の16冊は、明治から昭和の初期にかけて現在の女性には想像もできない時代に生きた女性の記録です。親の言うままに結婚し、たとえ人間らしい扱いを受けなくても、自分を殺して生きることが女性の道だと考えられていた時代に、そこから抜け出し、自己を主張し確立し、さらに同性のために活躍した方たちの記録です。三浦綾子著『われ弱ければ』の矢嶋揖子は、女性の側から離縁をしたことへのすさまじい非難に耐えながら小学校の教師として独立し、その後女子学院の初代校長となり女子教育の基礎を築きました。また日本キリスト教婦人矯風会の会長として、廃娼と禁酒の実現のために働きとおしました。萩野吟子著『花埋み』は、夫から病気をうつされ「子無きは去る」と離別され、しかも男性の医師に治療される以外に方法のなかった苦しみから、同性のために医師を目指し、明治政府公認第一号の女医になりました。このような方たちがいらしたから、現在の私たちがあるのではないでしょうか。竹西寛子著『人と軌跡』も九人の素晴らしい女性たちの伝記です。

森崎和江著『からゆきさん』は前回差し上げた『サンダカン八番娼館』と同じテーマです。山田盟子著『慰安婦たちの太平洋戦争』も加えます。戦争は「からゆきさん」の存在を許していた日本人が起こすべくして起こしたことではないでしょうか。戦後、占領軍の兵士相手の女性をも黙認しました。どうして女性の「性」をこのように扱えるのか。これを黙認していることは、廃娼運動に尽くし女性の自己確立を願った矢嶋揖子に恥ずかしいのではないでしょうか。

No.17～25は太平洋戦争中の女性の記録です。私は終戦の年に女学校の２年生でしたから、実際に経験し、見聞きしたことと重なることがたくさんあります。沢村貞子著『貝の歌』、團ジーン著『渚の歌』の「覚悟のある生き方」に尊敬の念を覚えずにはいられません。

カルメン・ジョンソン『占領日記』は戦後すぐに、占領軍の女性が「民主主義」を戦後日本の女性に教えようとした記録ですが、どうして日本の女性たちと噛み合わなかったのか。読んでみてください。ジェーン・コンドン著『半歩さがって』は傑作です。というのは、米国人の女性が、1980年代の日本の女性のあらゆるといってよいタイプ・職業の女性の日常を多面的に取材して書いたもので、中にはいささかステレオタイプ的な見方のところもありますが、戦後40年間に日本の女性がどう変わったか、変わらなかったかが描かれています。メイ・T. ナカノ著『三世代の百年』は在米の日系一世から三世までの女性の記録です。日本女性としての、どのような価値観がどのように大事にされ、伝えられてきたかが記されています。

No.31～38は戦後半世紀のさまざまな女性の記録といえるものです。No.39～47は、在日韓国人・朝鮮人の方の書かれたものです。『黒い傘の下で』は、東京の福祉大学で教えていたオーストラリアからの友人が見つけて、クラスの学生に読ませたものです。

中国・韓国・朝鮮についての本はまだ手元に置きたいものが多すぎて困っている状態です。世界の各地の女性史も大分集めています。しかしここ20年ほど、地元で日本語が母語でない方たちに日本語を教えるボランティアに没頭しておりまして、女性誌の勉強をあまりいたしていませんで、このような文を書くこともお恥ずかしいかぎりです。

GF STUDIES

第１回・第２回の

「卒論講習会」を開催しました。

5月30日と７月11日、ジェンダーフリースペース（G棟112教室）で、今年度の「卒論講習会―ジェンダーの視点から」を開きました。

浅井幸子、杉浦郁子、船橋邦子、竹信の4教員が担当し、卒論を執筆中の4年生や、これからどのように卒論の準備をしていこうかと考えている3年生、ジェンダーの問題に関心がある研究生などの参加者と、卒論とは何か、ジェンダーの視点とは何か、ジェンダー関係の資料をどう探すのかなどをめぐって、活発な話し合いが行われました。

まだ、問題関心が絞り切れていない人も少なくありませんでしたが、それをどう料理すればテーマとして練り上げていけるのかを各教員が具体的に助言し、楽しい中にも刺激のある会合となりました。

これからも卒論指導の回は定期的に行います。日程が決まりましたら学内に掲示しますので、卒論やジェンダー問題に多少でも関心のある方は学部学科を問わず、ぜひのぞいてみてください。（**竹信三恵子**・現代人間学部現代社会学科）

GENDER STUDIES PROGRAM

〈ジェンダー・スタディーズ・プログラム〉履修のすすめ

〈ジェンダー・スタディーズ・プログラム〉は社会生活のさまざまな場において、ジェンダー問題に対処できる力を獲得してもらうことを願って、和光大学に設けられている大学認定資格です。プログラムの修了を目指して授業を履修することによって、ジェンダーについて広く深く学ぶことができます。他学部他学科の科目を広く履修できる和光大学の特徴を生かしたプログラムです。

2012年度よりジェンダー・フォーラムが担当となりました。プログラムの申請およびレポートの提出先がジェンダー・フリー・スペース（G棟112教室）となりました。

プログラムの修了要件

❶コア科目の履修（12単位以上）　「女性学」「男性学」「男と女の表現空間」「女性企業家論」など各学部学科の科目から16のジェンダー関連科目がコア科目に指定されています。詳しくはジェンダー・スタディーズ・プログラムのリーフレットを参照してください。

❷関連科目の履修（８単位以上）　ジェンダーにかかわると本人が判断する科目です。コア科目の履修が12単位を超えた場合、超えた分を関連科目として加算できます。

❸レポート１の提出（随時）　レポート１は、ジェンダー関連施設（公的機関やNGO等）におけるインターンシップの報告、ジェンダー関連イベントへの参加記録、ジェンダーに関する卒業論文の要約などをあてることができます。

❹レポート２の提出（卒業年次２月初め）　レポート２は、①ジェンダー関連科目の履修を通して学んだこと、考えたこと、②それらを通して全体として学んだこと、考えたことを書いてください。

レポート1、2ともに3000字程度を目安としていますが、それより短くてもかまいません。

毎年4月に申請を受け付けます。何年生でも可能です。みなさんのプログラム申請をお待ちしています。

（**浅井幸子**・現代人間学部心理教育学科）

WAKO GENDER FREE SPACE HISTORY 2009—2011

和光大学ジェンダー・フリースペースの活動　2009—2011

2009年

3月　「第２回 GF ソツスナ」を実施・約 100 名を撮影
4月　「GF 通信　13 号」発行—〈最近の仕事〉奥須磨子・高橋　巌・〈著者の言葉『子宝と子返し』〉太田素子
4月　卒業生から「暮らしの手帖」160 冊の寄贈を受ける
6月　第７回企画展示「和光・スポーツ・ジェンダー」— 話題の最新水着ミズノSSTが注目の的に
10月　講演「妊娠・出産の美術—女性を見る眼の変化による描かれ方」講師：中川素子（文教大学教授）
10月　「GF 通信　14 号」発行　—エッセイ「水着の話」塩崎文雄・「科学技術とジェンダー」内田正夫
12月　ワークショップ「やってみよう!　和光流クッキング」講師：GFS スタッフ

2010年

2月　ワークショップ「デーティング・バイオレンスを考えてみよう」講師：女性ネット Saya-Saya
2月　「和光大生のための〈生活力〉育成プログラム」が 2010 年度和光大学教育重点充実費を受ける。
4月　「GF 通信　15 号」発行　—エッセイ「ジェンダー・フリー・スペースの蔵書の魅力」道場親信
6月　口演「山下さんちの物語—ジェンダーからの出発」講談師：宝井琴桜 — 講談は初めてだったけど面白かったとの声多数
6月　ワークショップ「女性のための護身法セミナー」講師：森山奈央美・三宅りお（インパクト東京）
7月　ワークショップ「戦争と女性を考える」講師：出口雅子（ピナツボ復興むさしのネット）—フィリピン女性の語るビデオを見て学生もシンミリ
10月　「GF 通信　16 号」発行—女性講談の宝井琴桜さんが口演!
10月　和光大学生のための〈生活力〉育成プログラム・ワークショップ
　講演「〈自然〉出産の持続可能性」講師：きくちさかえ（マタニティ・コーディネーター）
10月　和光大学生のための〈生活力〉育成プログラム・ワークショップ　講演「育児休業制度とは」講師：野城尚代（東洋大学社会学部講師）
10月　和光大学生のための〈生活力〉育成プログラム・ワークショップ
　「女子学生のための護身術講座　全５回」指導：関根秀樹（本学講師・空手道部顧問）湯浅　心（空手道部師範）
11月　第８回企画展示「女性学の挑戦—〈女らしさ〉の神話を超えて」・現代社会学科と共催
11月　シンポジウム「女性学の挑戦—和光大学 35 年の経験から」　主催=現代社会学科　後援=川崎市教育委員会・町田市教育委員会
　基調報告：井上輝子　報告：阿部裕子・諸橋泰樹・千田有紀　司会：道場親信
12月　和光大学生のための〈生活力〉育成プログラム・ワークショップ
　講演「ローン・クレジットを利用する際の留意点」講師：渡邉俊之（全国銀行協会企画部広報室長）
12月　和光大学生のための〈生活力〉育成プログラム・ワークショップ
　「日本経済のこれからと私たちの暮らし・おカネ」経済学科徳永潤二ゼミ・加藤巌ゼミと共催
　講演「人生設計と資金計画—金融リテラシーの必要性」講師：松田　岳（東京富士大学）
12月　和光大学生のための〈生活力〉育成プログラム・ワークショップ
　「和光流クッキング—和光大生のための料理教室」講師：GFS スタッフ

2011年

3月　「ジェンダー・スタディーズ・プログラム」の履修者２名に履修証明書を発行

FROM THE GENDER FREE SPACE

〈ソツスナ〉ってご存知?

大学卒業の晴れ舞台に、皆さんはどんなファッションをチョイスしますか?

女性は華やかなドレスか美しい着物ですか? 男性だったら紋付袴かタキシードで決めるのでしょうか? それとも「女らしさ」「男らしさ」ではなく、あくまで「自分らしさ」を表現するのでしょうか? ファッションは、みんなの「○○らしさ」を表現するものだと言えます。

ジェンダーフォーラムでは、毎年卒業式の学生の晴れ姿を写真撮影し、その記録を残し続けています。これを〈ソツスナ=卒業スナップ〉と呼んで、卒業する学生たちに協力をお願いしていますが、ソツスナの写真からは、学生たちのファッションセンスのすばらしさはさることながら、年々の流行やその変遷、はたまた社会状況や時代背景なども垣間見ることができて、なかなか素敵で興味深いスナップ集ができ上がりつつあります。ここに2011年度卒業生の晴れ姿の一部をご紹介します。 (**阿野理香**・GFスタッフ)

〈デートDV防止啓発講座〉のお知らせ

これって、デートDV?

楽しく心地よいはずの恋愛が、
〈傷つく〉〈耐える〉恋愛になっていませんか?
どうすればパートナーと対等に
お互いを尊重しあう関係を作っていけるか
を考えます。

11月15日(木)
14時40分—16時10分:J401教室

主催:町田市男女平等推進センター
協力:和光大学ジェンダーフォーラム
　　+共通教養科目「法と人権」
お問い合わせ:☎042-723-2908

FROM THE GENDER FREE SPACE

〈木曜研究会〉のこと

井上輝子・和光大学名誉教授

木曜日のジェンダー・フリー・スペースでは、卒業生や大学院生、GFスタッフ、ジェンダーに関心を持つ社会人などが集まって、定期的に研究会を開いています。今年は、シモーヌ・ド・ボーヴォワール『第二の性』を輪読しています。

『第二の性』(1949年)は、20世紀にもっとも注目され、1960年代以後のフェミニズムにも大きな影響を与えた女性論・女性研究の古典です。日本でも1953-55年に邦訳が出版され多くの女性たちに読み継がれてきましたが、その後、邦訳には男性視点による偏りや間違いがあることが指摘され、原著に当って翻訳しなおす運動が起きました。その中から新訳が生まれ、1997年に『決定版 第二の性』が出版されました。私たちがテキストとしているのはこの新訳です。

本書は「Ⅰ事実と神話」「Ⅱ体験」の2部から構成され、前期には体験編を読みました。子ども時代から思春期、性の入門から結婚、さらに妊娠・出産・育児と続く、女性の一生の各段階で、女性たちがいかに「女」としてつくられていくのかが、欧米の女性の手記や小説、調査研究、精神科医の症例報告などを駆使して、女性の内面に即して見事に記述されており、60年以上前に書かれた作品とは思えないほど、私たちにとっても身につまされる内容になっています。重要な箇所を要約しようと思っても、どのページも重要に思えて「写経」のように書き写すことが多く、報告者のレジュメが分厚いものになることもしばしばです。後期は「Ⅰ事実と神話」を読み始めたところです。

研究会では輪読だけでなく、ボーヴォワールが監修した1980年代のビデオを観たり、ボーヴォワールについての研究書を紹介したり、メンバーの個人研究発表の機会もつくっています。木曜3時限がメインですが、昼休みにはお弁当を食べながら、終了後にはお茶を飲みながら、雑談に花が咲きます。時には卒論の相談に来る学生や、卒業生・ばいでいあの受講生などが立ち寄って、おしゃべりをする場にもなっています。興味のある人は、覗いてみてください。

(**井上輝子**・和光大学名誉教授)